

9. 事業広報（プロモーション）

HIV即日検査は、エイズ対策の一環であり、またSTI対策の一環でもある。従って、これらの事業との相乗的効果を念頭において実施することが望まれる。また、HIV即日検査を適切にかつより効果的に行うためにはHIV即日検査実施の管理体制を整備しておくことが必要である。当日に実施する業務以外の関連業務については、HIV診療機関や精神保健専門機関等の関連機関と連携し、事前の調整を行っておくことが望ましい。特に、本事業の目標を踏まえ、効果的な広報を行うことは重要であり、他の事業や関連機関との連携でより有効な広報を実施することが望まれる。

■ 事業の広報

ホームページ、電話帳、広報誌あるいはマスメディアによる広報を積極的に行うことで利用者の増加をはかる。これらの広報はエイズに関する啓発ともなるので、エイズ・性感染症検査受検に肯定的なイメージを付与するために、「HIV検査受検は、自らの早期発見・治療とともに、感染拡大防止を考える、心ある決断です」等のメッセージを加える。

広報には、即日検査の特徴として、無料・匿名であること、プライバシーを守ること、検査当日にHIV検査結果が判明すること、陰性の場合は保健所に再来所の必要性がないこと、陽性の場合には確認検査後に正確な結果を1～2週間後に知らせること、等を挙げる。また関連した情報として、

医療の進歩、国及び地域におけるHIV／エイズの発生動向、地域で行っているエイズ・性感染症対策の情報等がある。

■ 電話等による受付

予約制の場合には電話等による受付を行い、予約表等を作成し、重複が生じないようにする。エイズ性感染症の相談に備え、Q&Aを準備する。

また、電話受付に関しても、広報に具体的に分かりやすい記述で案内する必要がある。

10. 評価と活用

■ HIV 即日検査・相談事業評価の基本的考え方

本事業は、即日検査という利便性の高い新たな方法を導入することで、今までHIV検査を受けにくかった潜在的な希望者にも検査・相談の機会を提供し、エイズ対策に寄与しようとするものである。そこで、新しい検査・相談の質を確保するとともに、導入した検査相談がどの程度効果があったのか、導入前に想定した目標に一致しているのか、効率的に提供されているかを点検し、改善していくことが重要となる。

このために必要となる基礎的な統計数値は、常時作成する業務の記録に組み込んでおくと継続的に把握でき、また容易に点検ができる。例として、検査記録、相談記録の他に、受検者の検査前の説明・相談の際に得たアンケート結果を利用することができる。基本的項目を表3に、質問票の例を47ページ（資料3様式6）の「検査前の質問票の例」に示した。実際に用いる質問票は、利用者や地域の状況に合わせて項目を検討し、保健所等の実施機関が作成する。

受検者への質問票には、個人情報保護の観点から、①検査前後のアンケート結果は事業改善のために集計・分析し用いる場合があること、②回答したくない場合は回答しなくてもよいこと、③個人が特定される形では用いられないこと、を示した上で必要に応じて説明を補足し協力への同意を求める。

表3

HIV即日検査・相談事業における評価

評価の項目	具体的評価事項
(1) 検査結果	迅速検査陽性数及び陽性率 確認検査陽性数及び陽性率 偽陽性数および偽陽性率
(2) 利用状況	受検者数および受検者の性、年代、居住地など受検者状況 コンドーム使用などの予防状況等
(3) 受検者の満足度	説明、情報提供、相談への満足度 プライバシー保護への満足度等
(4) 説明相談の効果	知識正答率、感染予防行動調査 要確認検査の受検者の再来率 陽性者の受診率と継続相談率、 精神科等の紹介と受診率等

※偽陽性・偽陽性率：33ページ参照

■ 検査結果

検査は目視による判定であるため、検査技術に加え判定についても精度の保証が求められる。このため、技術的な正確さの精度管理に加え検査実績による検査精度の点検も重要である。検査件数および、迅速検査の陽性数と陽性率、確認検査の陽性数と陽性率を把握し、これら検査結果の数値からも検査精度の妥当性を評価することが重要である。

現在使用されている迅速検査キットの偽陽性率はおよそ1%であり、これを大きく上回る（2%以上の）場合は、検査試薬のロットに問題があるか検査技術や目視の判定に問題がある可能性があるため検討が必要である。確認検査陽性数と陽性率は受検者の中にどれだけHIV感染者が存在するか

により大きく異なる。

(保健所等のHIV検査(確認検査)での平均陽性率はおよそ0.3%である。33ページ参照)

■利用状況

HIV即日検査を導入することによって利用者が増加する場合が多く、利用者増は事業評価の重要な数値でもあるが、さらには導入に当たって想定している利用者と実際の受検者がどの程度一致しているかについても、受検者へのアンケート結果を定期的に調査し、その結果を検査体制や広報の方法の改善に活かすことが望まれる。

現在の日本での報告感染者の過半数は同性間の性的接触による感染であり、若年者での報告も増加しているが、かなりの地域差がみられる。それぞれの地域における特性を考慮した上で、受検者の来所理由、年齢や居住地域に関する情報、事業に関する情報の入手先等のアンケート項目を定期的に集計・検討し、その結果を、準備資料や担当者の予備知識、広報の方法にも反映させることで、その後の事業を改善することができる。

さらに、エイズや性感染症対策の一環としては、エイズや性感染症への理解の浸透度を知るための目安としてもアンケート結果を役立てることが可能である。

■利用者の満足度

説明終了後にアンケート調査を行い、説明の理解度、相談のしやすさ、プライバシーの守秘等に関する受験者の満足度を尋ね、説明相談や待合方法などの改善にその結果を活かす。アンケートの回収率を上げるため、アンケート回収箱の設置場所を工夫するとともに、落ち着いてアンケートを記入できる場所を設けることが望ましい。

■事業の効果

自発的HIV検査・相談事業の主な目的は、感染の早期確認による早期受診、HIV感染予防のための行動変容への働きかけであり、広い意味では検査・相談事業を通じて受検者と国民にエイズそのものへの理解を広く促すことである。

HIV検査・相談事業の効果の一環として、陽性者が医療を早期に受診出来たかどうかを把握することは重要である。また、感染がわかってもすぐには受診できない陽性者については、相談の継続と、それら相談継続者数の把握が重要である。さらに、精神医療など各種医療機関等への紹介数と実際の利用実績も把握しておく。これらの事業実績を記録するとともに、その内容を総合的に検討して紹介体制や準備資料の改善に活かす。

予防への働きかけの効果は、受検者の予防行動変容の程度で評価されるが、日常的なアンケート調査でこれを評価するには

限界があるので、目的を明確にした調査・研究で補うことが望ましい。通常行うアンケート調査の予防行動に関するデータを用いて、2回目より複数回受検者で改善しているかどうかを調べることができる。また、検査・相談の前後の質問票に同一項目を入れて知識の変化を評価することができる。

検査・相談やエイズの理解促進への効果

は、エイズの医療や社会支援など一般知識の増加、受検経験者から紹介された受検者数などで計れる。また、広く県民、市民を対象としたアンケート調査の機会があれば、検査相談の利用経験、事業の周知度やエイズの一般的知識・意識を調査項目に加え、事業効果を調査することもできる。

表4

HIV検査・相談事業評価項目の概要

	項目	意義・細項目等
受検者特性評価 (検査説明相談前調査)	性別 年代 今回の受検理由・時期 過去1年間コンドーム使用頻度 検査回数・場所 相談相手の有無 検査・相談サービス情報の入手源	地域特性 地域特性 心配する感染経路 感染予防習慣 受検行動 陽性時の支援者 広報など施策との照合
HIV即日検査・相談サービスの質評価 (検査説明相談後調査)	申し込み受付に対して 検査相談サービス・態度に対して プライバシー保護について 有用知識・手段の獲得 検査相談情報入手源・媒体 自発的検査・相談のパートナーへの普及 陽性者に対する医療機関等の紹介は適切か 感想・要望・期待	受検者の満足度 受検者の満足度 受検者の満足度 説明・資料の分かりやすさ 広報など施策との照合 自発的検査・相談普及の可能性 サービスの質 自由意見
HIV即日検査・相談の効果評価	受検者数 HIVエイズや検査・相談の知識と意識 心配する感染経路HIV感染予防行動 陽性者の医療機関受診	受検者数の増加 知識・意識の改善 感染予防行動への効果 早期受診効果

資 料

1	即日検査に関するQ&A (担当者向け)	29
	A. 即日検査に用いる検査法 (迅速検査法) について	
	B. 迅速検査で陽性 (要確認検査) の場合	
	C. 迅速検査で陰性の場合	
	D. 感染の機会から3ヶ月以内 (ウインドウ期間内の可能性) の検査について	
2	HIV即日検査・相談の流れ (詳細版)	38
3	即日検査受検者へ手渡す資料	40
	受検者への説明資料	
	受検者検査前用 (様式1)	
	迅速検査結果説明用	
	陰 性 : 結果説明 (様式2)	
	陽 性 (要確認検査) : 結果説明 (様式3)	
	確認検査結果説明用	
	陰 性 : 結果説明 (様式4)	
	陽 性 : 結果説明 (様式5)	
	受検者への質問票	
	検査前の質問票の例 [HIV即日検査を受けられる方へ] (様式6)	
	検査後の質問票の例 [HIV即日検査を受けた方へ] (様式7)	
4	即日検査に必要なキット・機材	49
5	ホームページ「HIV検査・相談マップ」紹介	50



即日検査に関するQ & A

(担当者向け)

① 即日検査に用いる検査法(迅速検査法)について

- Q-1 従来法とどこが違うのですか？
- Q-2 検査に必要なものは何ですか？
- Q-3 迅速検査の検査結果は信頼できますか？

② 迅速検査で陽性(要確認検査)の場合

- Q-1 その場合の確認検査はどのように行われますか？
- Q-2 偽陽性とは何ですか？
- Q-3 偽陽性の頻度はどの程度あるのですか？
- Q-4 迅速検査陽性(要確認検査)の中で占める“真の陽性”(感染者)の割合はどれくらいですか？
- Q-5 迅速検査の偽陽性を見分ける方法がありますか？
- Q-6 追加検査(抗原抗体同時検査)でどれだけ偽陽性を除外できますか？
- Q-7 迅速検査陽性(要確認検査)をどのように説明したらよいですか？

③ 迅速検査で陰性の場合

- Q-1 陰性であれば感染していないと言えますか？
- Q-2 検査時期がウインドウ期間内の場合は再検査が必要ですか？
- Q-3 迅速検査で陰性の場合にはどのように説明したらよいですか？

④ 感染リスクから3ヶ月以内(ウインドウ期間内の可能性)の検査について

- Q-1 検査をすることに意味はありますか？
- Q-2 ウインドウ期間内でも陽性となることはあるのですか？
- Q-3 陰性の場合どのような意味がありますか？
- Q-4 陰性の場合再検査は必要ですか？

A 即日検査に用いる検査法(迅速検査法)について

従来法とどこが違うのですか？

A HIV即日検査に用いられる迅速検査法もHIVの抗体検査法であり、この点は従来のHIVスクリーニング検査法と同じです。従来法と異なるのは、イムノクロマト法を用いたキット(ダイナスクリーン・HIV-1/2)を使用した場合、血清、血漿または全血等の検体を滴下しそのまま静かに置いておくだけで、15分後には結果が判定できる等、検査に特別の機材を必要としないことと迅速に結果が得られる点です。ただし、迅速検査では通常の抗体検査法に比べ偽陽性がおおよそ1%(従来の抗体検査法の偽陽性0.3%程度)と多いため、その使用にあたっては、この偽陽性問題に関して十分な配慮が必要です。

検査に必要なものは何ですか？

A HIV抗体迅速検査キット(平成17年3月現在、迅速検査キットとしてはダイナスクリーン・HIV-1/2が認可されている)、マイクロピペット、マイクロピペット用チップ、遠心機(全血で検査する場合は不要)、結果判定図、結果記録台帳等が必要です。本キットを用いた検査結果の判定は特別の装置を使わず肉眼で行いますが、微量検体の扱いや、微妙な判定ラインの読みとり等も必要なため、検査に習熟した人が検査を担当することが望まれます。また、即日検査の導入にあたっては、迅速検査キットの使用法、判定法、陽性検体の確認検査等について、研修等により十分習熟しておくことが必要です。

迅速検査の検査結果は信頼できますか？

A 迅速検査はHIV抗体スクリーニング検査法の一つとして、通常のHIV抗体検査法と同様にその検査結果は信頼できます。通常のHIV抗体検査法で陽性となった感染者検体を用いた感度比較では、迅速検査法もほぼ同等の検出感度であることが確認されています。ただし、偽陽性がおおよそ1%と通常検査に比べやや多いため、迅速検査で陽性の場合、その対応とその後の検査の進め方については、十分検討し整備しておくことが必要です。

B 迅速検査で陽性(要確認検査)の場合

その場合の確認検査はどのように行われますか？

A ① 追加試験(抗原抗体同時検査、抗体検査等)による偽陽性例の除外
通常、抗体スクリーニング検査で陽性となった場合、WB法で抗体の確認検査を行います。しかし、現在使用可能な迅速検査(ダイナスクリーン・HIV-1/2)の場合偽陽性が多いこともあり、確認検査の前に抗原抗体同時検査等の追加試験を加えることで、偽陽性を除外することが可能です。抗原抗体同時検査法では感染初期の抗原陽性期(抗体が検出される前)からHIV感染の検査が可能であり、また抗体も迅速検査に比べより高感度に検出できます。このため、迅速検査で陽性であっても追加試験の抗原抗体同時検査で陰性であればスクリーニング検査陰性、即ち迅速検査が偽陽性であったと判定できます。抗原抗体同時検査キットとしては、現在、4試薬(バイダス HIV デュオ、ジェンスクリーン HIV Ag-Ab、エンザイグノスト HIV インテグラル、アキシム HIV Ag/Ab コンポアッセイ・ダイナパック)があります。バイダス HIV デュオ(日本ビオメリュー社)の場合、1検体ずつの検査が2時間で可能です(ミニバイダス等のペロ毒素検査等にも用いられている中型専用機器が必要)。北海道立衛生研究所の検討結果では、迅速検査の偽陽性例19例中19例とその全てが抗原抗体同時検査(バイダス HIV デュオ)で陰性となりました。このため、即日検査の結果返しまでに時間的余裕があり、専用機器の導入と操作が可能な施設においては、即日検査の陽性(要確認)例を大幅に減少させることが可能です。即日検査陽性で抗原抗体同時検査でも陽性となった場合には、真の陽性(感染)である可能性がかなり高く、WB法等による確認検査を慎重に行うことが必要です。

なお、追加試験として抗原抗体同時検査の実施が困難な場合には、通常の抗体検査法(PA、EIA)を追加検査として用いるという選択もあります。特に、PA法の場合特別の機器を必要としないため、迅速検査で陽性となった時、現場で直ちにPA法を追加試験として実施しその結果を即日検査の結果返しに反映出来れば、偽陽性を大幅に減らすことが出来ます。

②WB法等による確認検査

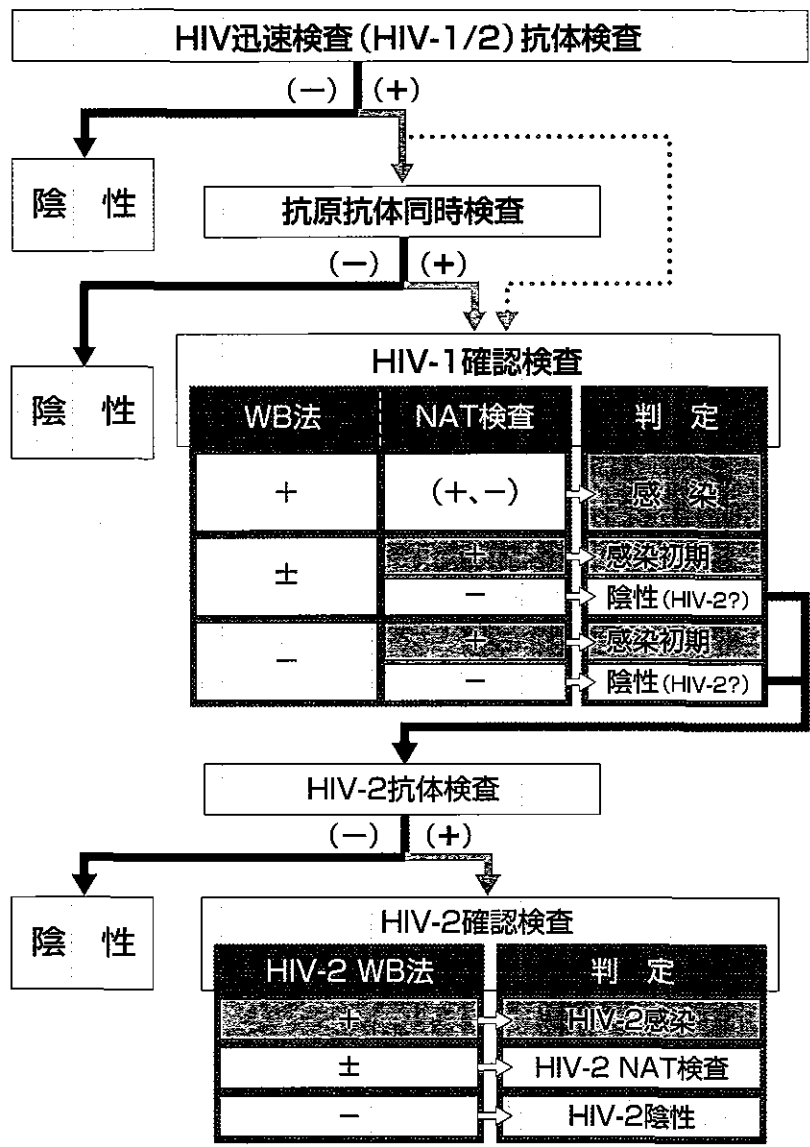
迅速検査陽性(要確認検査)であり、追加試験でも陽性(検査数数の少ない施設では迅速検査の陽性例も少ないため追加試験の省略も可能)の検体については、WB法と必要に応じて核酸増幅検査等を用いてHIV確認検査を行います。WB法で陽性の場合にはHIV抗体陽性(HIV感染)と確定できます。WB法で判定保留または陰性の場合には、IgG抗体が極めて微量かIgM抗体のみが上昇して

いる感染初期の可能性が残るため、核酸増幅検査によりHIV遺伝子の検出を行います。核酸増幅検査で陽性であればHIV感染初期と考えられます。核酸増幅検査陰性かつHIV-2抗体も陰性であればスクリーニング検査の陽性結果は偽陽性であったと確定できます。

感染リスクから3ヶ月以内に検査を行った場合には、非感染を確定するためには3ヶ月以上経過してからの再検査が必要です。また、WB法で判定保留の場合に、核酸増幅検査が行えない場合には、数週間後に再検査を行い、抗体の上昇から感染初期であったかどうかを確認することも可能です。受検者の精神的負担を考えるとできるだけ再検査を避けられる検査体制(広域的検査協力体制や研究班との協力体制等)を構築しておくことが望まれます。

図9

HIV迅速検査実施フローチャート



偽陽性とは何ですか？

A HIVに感染していないのにHIV抗体検査で陽性の結果になることです。その原因の一つとして、抗体の交差反応(HIV抗原とたまたま反応する抗体による反応)等が考えられますが、その本当の原因はほとんどの場合に不明です。ただ、偽陽性の場合、異なる検査法・検査キットでは陰性となることも多いため、異なる検査法の組み合わせ(PA法とEIA法等)により、偽陽性を減少させることが可能です。迅速検査の場合には、前述の抗原抗体同時検査を用いて、偽陽性のほとんどを除外することが可能です。

Q-2 偽陽性の頻度はどの程度あるのですか？

A 迅速検査の場合、血清や血漿を用いた検査ではおよそ1%、全血を用いた検査ではおよそ0.5%の偽陽性があります。通常のHIVスクリーニング検査ではおよそ0.3%の偽陽性があります。

迅速検査陽性(要確認検査)の中で占める“真の陽性”(感染者)の割合はどれくらいですか？

A 迅速検査で陽性となった人の中で“真の陽性”(感染者)が占める割合、あるいは偽陽性が占める割合は、受検者集団における偽陽性率と感染率(感染者の存在率)により異なります。迅速検査受検者における感染者の割合が千分の一、偽陽性率が百分の一の場合に1000人が受検した時を考えてみます。迅速検査の結果では、偽陽性による陽性が10人と感染者による陽性が1人の計11人が陽性となります。迅速検査で陽性となった人の内、感染者は1/11の9%のみです。これを陽性的中率と表現します。陽性的中率は検査の精度だけでなく受検する人々における真の陽性者(HIV感染者)の割合(感染率)に大きく依存しています。もし、受検者における感染者の割合が100人に1人(1%)の場合は、迅速検査陽性者の50%が真の陽性(感染者)となります。保健所における受検者の中での感染者の割合は平均1000人に3人(0.3%)ですから、迅速検査陽性者中の真の陽性(感染者)は平均ではおよそ3/13(23%)となります。

迅速検査の偽陽性を見分ける方法がありますか？

A 迅速検査では結果を肉眼で判定します。非常にうすい(弱い)バンドの場合は、ほとんどが偽陽性ですが、感染初期の抗体価の低い時期の可能性も否定できません。また、非常にはっきりしたバンドであっても偽陽性の場合もあり、迅速検査のバンドの見え方から偽陽性を判断することは困難です。上述のように、抗原抗体同時検査等の追加試験を行うことができれば、ほとんどの偽陽性を除外することは可能です。

追加検査(抗原抗体同時検査)でどれだけ偽陽性を除外できますか？

A 抗原抗体同時検査法では、検体中のHIV抗原とHIV抗体のいずれをも同時に検出できるため、抗体検出法に比べ感染初期(抗体への陽転前の抗原陽性期)からHIV感染の検査が可能です。従って、迅速検査で陽性であっても抗原抗体同時検査法で陰性であれば、迅速検査の陽性が偽陽性であると確定できます。迅速検査の偽陽性検体のほとんどが、抗原抗体同時検査法では陰性となるため、迅速検査の陽性検体に追加検査として抗原抗体同時検査を実施することにより、迅速検査の偽陽性のほとんどを除外できることが確かめられています。

北海道立衛生研究所での保健所検体2242検体(血清)を用いた予備試験では、迅速検査陽性が27例あり、その中で、抗原抗体同時検査のできた検体が19例あり、19例全例が抗原抗体検査陰性で、迅速検査の偽陽性(HIV非感染)との結果を得ています。また、東京都内の民間クリニックでの即日検査4714例(全血)では、迅速検査陽性40例中、抗原抗体同時検査陽性が26例あり、その24例が真の陽性(HIV感染)で、2例は確認検査陰性(HIV非感染)との結果を得ています。また、40例中、抗原抗体同時検査陰性の14例については、その全例が迅速検査の偽陽性(HIV非感染)であることが確認されました。

迅速検査陽性(要確認検査)をどのように説明したらよいですか？

A 上記のように迅速検査では偽陽性が多いこと、また陽性的中率が平均では23%と低いことを十分考慮して、ガイドライン本文(15ページ)を参考に迅速検査の陽性の意味と確認検査の必要性、今後の相談体制等を十分説明して下さい。



C 迅速検査で陰性の場合

陰性であれば感染していないと言えますか？

A 迅速検査で陰性であればHIV抗体が検出されないことから、感染リスクから3ヶ月以上経過し、ウインドウ期を過ぎている場合には感染していないと言えます。

検査時期がウインドウ期間内の場合には再検査が必要ですか？

A 感染リスクから3ヶ月以内(ウインドウ期)の人が検査を受け、陰性となった場合には、感染していないことをはっきりさせるためにはウインドウ期(3ヶ月)を過ぎた後での再検査が必要です。

現在の抗体検査法は以前に比べかなり改善されており、検出感度も高くまたIgM抗体も検出できるため、通常は感染後1ヶ月くらいまでに抗体が検出されます。したがって、リスク後3ヶ月以内であっても迅速検査で陰性であれば、感染の可能性はかなり少なくなると考えられます。感染不安があり検査を希望する相談者には、3ヶ月内であっても、ウインドウ期のこと、検査時期と結果の解釈、再検査のこと等も十分説明し、検査を受けるかどうか判断してもらうことが重要です。

迅速検査で陰性の場合にはどのように説明したらよいですか？

A 迅速検査で陰性、即ちHIV抗体が検出されず、3ヶ月前まではHIVに感染していなかったと言えることを説明します。検査前の3ヶ月以内に感染リスクがあった場合には、感染していてもまだ抗体が検出されないという可能性も否定できないため、感染リスクから3ヶ月以上経ってからもう一度検査を受ける必要があることを説明します。また、今後の生活におけるリスク回避の必要性や、必要に応じて、今回の陰性結果が今までの性行動等の安全性を意味するものではないこと、すなわち、今までの性行動等に感染の危険性があっても、たまたま運良く感染しなかったという可能性もあるため、感染リスクを今後とも慎重に避ける必要があることも説明します。(ガイドライン15ページ参照)

D 感染リスクから3ヶ月以内（ウインドウ期間内の可能性）の検査について

検査をすることに
意味はありますか？

A 感染不安を感じてエイズ相談をする人の中には、感染リスクから3ヶ月以内の人もかなり含まれている可能性があります。これら、比較的最近のリスクに対して感染不安を抱いている人々に対して、検査機会も含めた十分な相談機会を提供することは、感染の早期発見や感染リスクの低減、感染予防等の観点からも極めて重要です。また、感染初期の可能性のある人に対して検査機会を提供することは、検査目的の献血を防止し、輸血後HIV感染を防止する意味でも極めて重要です。

ウインドウ期間内
でも陽性となる
ことはあるのです
か？

A 迅速検査法も含めて現在の抗体スクリーニング検査は検出感度も鋭敏で、IgG抗体に加えIgM抗体も検出できるため、以前の検査試薬に比べ、かなり早い時期から抗体を検出できるように改善されています。その結果、多くの場合、感染後1ヶ月くらいまでに抗体が検出されます。この時期にもし迅速検査が陽性となった場合には、抗体価が低かったり、IgM抗体の時期であったりするため、WBでは判定保留または陰性となる可能性があります。このような場合には、抗原抗体同時検査法等による追加試験や核酸増幅検査による確認が必要です。そのためにも、全ての受検者に感染リスクの時期を確認しておくことが重要です。

陰性の場合どのよ
うな意味がありま
すか？

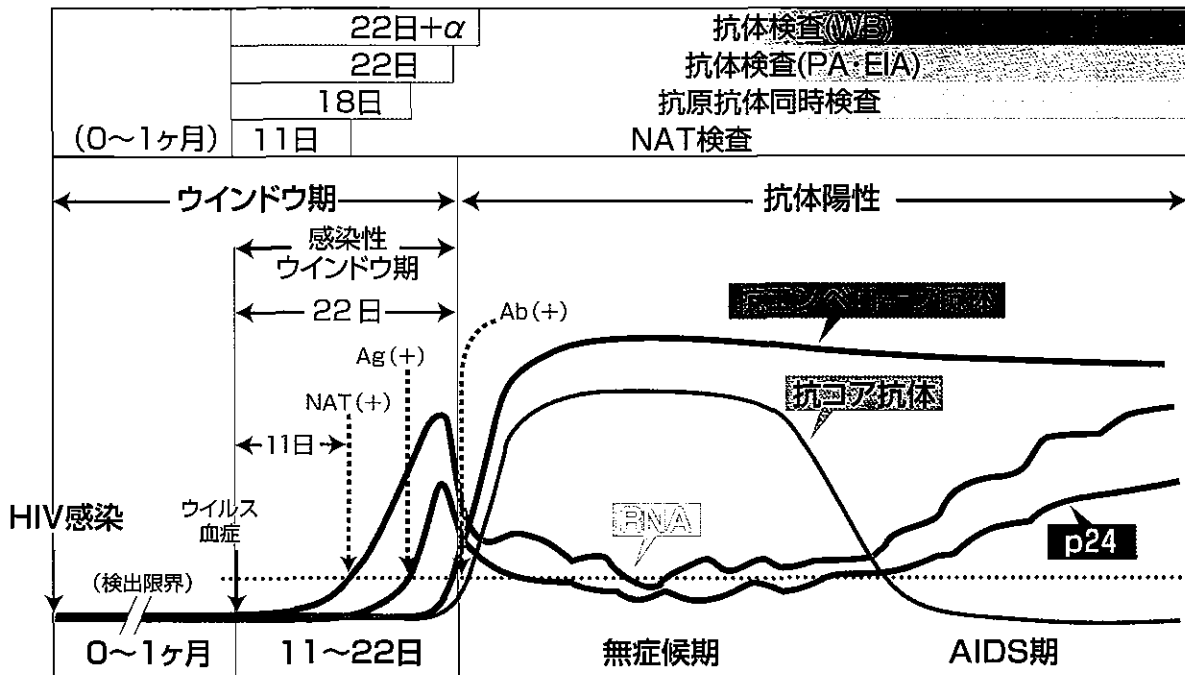
A 通常は感染から1ヶ月までに多くのケースで抗体が検出されます。従って、感染の機会から1ヶ月以上経っての検査で陰性であれば、感染の可能性はかなり小さくなります。2ヶ月以上経っていれば感染の可能性は極めて小さいと言えます。また、1ヶ月以内であっても、少なくとも検査の時点から3ヶ月以上前にあった感染リスクに対しては感染していなかったことが分かります。

陰性の場合再検査
は必要ですか？

A 感染リスクや感染不安の程度にもよりますが、感染していないことを確実にするためには、感染リスクから3ヶ月以上経過した後の再検査が必要です。

図10

HIV感染とウィンドウ期間



ウィンドウ期 HIV感染初期で、感染していても検査では陰性となる期間。現在の抗体検査では通常1ヶ月で抗体が検出される。従って本来の意味では抗体検査のウィンドウ期は1ヶ月と言える。ただし、HIV検査で陰性の時に感染していないと言い切るため、HIV検査では安全をみて長めの3ヶ月という期間が通常用いられている。

感染性ウィンドウ期 ウィンドウ期の中で血中にウイルスが存在し輸血によりHIV感染を起こしうる期間を特に感染性ウィンドウ期という。感染性ウィンドウ期は現在の抗体検査では22日、遺伝子検査 (NAT: Nucleic acid Amplification Test) ではその半分の11日と計算されている。

HIV即日検査・相談の流れ（詳細版）

■ 電話受付と事前説明

■ ウィンドウ期および要確認検査に関する説明

- ◆ “感染予防のための相談”を取り入れる場合 → 希望する受検者はHIV感染予防に向けた面談も受けられることを伝える



■ 当日受付

■ 即日検査の流れの説明、アンケート票（資料3 様式6参照）の記入の依頼

■ アンケート票の記入

- ◆ “感染予防のための相談”を取り入れる場合 → アンケート票に相談希望の有無の設問を追加する
- 希望する受検者はHIV感染予防に向けた面談も受けられることを伝える

準備) アンケート票、紙ばさみ、鉛筆

即日検査の特徴、早期発見・早期治療の有用性とHIV医療の進歩、
即日検査・相談の流れ等に関するパンフレット・掲示物



■ 検査前説明と相談 **5～10分(目安)**

■ 即日検査の流れの確認

■ 検査の必要性の確認

■ エイズについて、即日検査についての理解の確認・補足修正

- HIV感染とエイズ発症との違い
- ウィンドウ期の理解
- 要確認検査の理解

■ HIV即日検査について理解した上での受検意思の確認

◆ “感染予防のための相談”を取り入れる場合（+10分）

- ◇ 予防相談の説明と同意
- ◇ 過去の検査受検動機および今回の即日検査受検動機を確認
- ◇ HIV感染予防の知識と理解
- ◇ 感染可能性のある行動の振り返りと自己評価
- ◇ 感染予防のための行動変容プラン作成の話し合い（重要性と自信のチェックシート使用『19ページ図7参照』）
- ◇ プランのまとめ

準備) 即日検査の流れ図、HIV/エイズに関する資料、HIV感染予防のための行動変容関連の配布用パンフレット、
コンドーム使用方法の説明書、性感染症などに関するパンフレット、重要性と自信のチェックシートなど

準備できれば) MSM、セックスワーカー、外国人対象のもの、性被害、静注麻薬使用などに関するパンフレットなど

▲ 不安が強い受検者は別枠で対応 **(+30分)**

準備) 神経症、性被害、静注薬物使用、エイズ専門派遣カウンセラーなどの専門家または専門機関のリスト
保健所やNGO/NPOの電話相談サービスなどのリスト



■ 採血、検査



■ 結果説明まで待機

■ 感染の可能性のある行動についての理解や、感染予防の行動変容を支援するための資料提供

準備 HIV/エイズに関する資料、HIV感染予防のための行動変容関連の配布用パンフレット、掲示物やビデオ、コンドームの使用法の説明書、性感染症などに関するパンフレットなど

準備できれば MSM、セックスワーカー、外国人対象のもの、性被害、静注薬物使用に関するパンフレット



■ 検査後の結果説明と相談 ▲ 不安が強い受検者は別枠で対応 (+30分)

【陰性結果の説明と相談】 5分～10分 (目安)

■ 陰性結果を伝え、結果の意味の理解を確認する

■ 確認・補足修正

- ウINDOW期の理解
- 陰性結果が行動の安全性を保証しないこと

◆ “感染予防のための相談”を取り入れる場合 (+5分)

- ◇ 検査前の感染可能性のある行動の振り返りと自己評価を踏まえた上での結果の理解
- ◇ 今後の感染予防行動変容プランを再確認
- ◇ プランの実施時期の確認と力づけ

【要確認検査の説明と相談】 10～15分 (目安)

■ 要確認検査であることを伝え、結果の意味と確認検査の必要性を伝える

■ 確認事項

- 今回の検査では結果が確定せず、確認検査が必要であること
- 確認検査の結果返却日の来所の意思の確認
- 確認検査の結果返却日の予約と来所の促し
- 確認検査の結果返却日までの電話等による相談先
- 結果返却日に来られなかった場合の連絡方法
- 他の検査機関紹介希望の有無

準備 性感染症予防のためのパンフレット、保健所やNGO/NPOの電話相談サービスなどのリスト
要確認検査の説明のために、声が他に聞こえず、十分な時間が取れる個室

準備できれば 神経症、性被害、静注薬物使用、性感染症などの専門家または専門機関のリスト

■ 要確認検査の場合 → 確認検査後の結果説明と相談

【確認検査陰性結果の説明と相談】

10分 (目安)

■ 確認検査の結果、陰性であることが確認できたこと

■ 後は、迅速検査が陰性の陰性結果の説明と相談に準じる

【確認検査陽性結果の説明と相談】 30分～1時間

■ 陽性結果を伝え、結果の意味を説明し、結果の受け入れが促されるような言葉かけを行う

■ 確認事項

- 疾患についての説明
HIV感染とエイズ発症の違い、治療方法の進歩
- 受診についての情報
医療機関の早期受診の意義と初回通院までの流れ
医療費補助や各種福祉制度
- 直後についての確認
帰宅の手段、帰宅後の相談相手の有無
希望者へ専門カウンセラー紹介や次回面談日予約
- 感染者向けのパンフレット、医療機関への紹介状

▲ 帰宅時および帰宅後の不安が強い場合について特に留意する

準備 陽性結果が出た場合に手渡しができるような医療機関リスト（医療機関の地図、エイズ担当診療科、医師名、電話番号）、紹介状の書式、福祉サービスに関するパンフレット、エイズ専門カウンセラーの派遣感染者のための保健所やNGO/NPO等の相談先リスト、感染者向けパンフレットなど

即日検査受検者へ手渡す資料

この資料は、HIV即日検査や検査結果の意味について受検者に理解してもらうため、また後からでも読み返してもらえるため、受検者へ手渡すことを目的に作成したものです。即日検査実施機関の担当者が、下記の各段階で該当する受検者にそれぞれの資料を手渡ししながら説明をすることを想定して作成してあります。必要であれば、各即日検査実施施設で、それぞれの施設の受検者に適したより使用しやすい資料に改変しご使用下さい。

● 即日検査の説明(検査前) → 即日検査を受検される方へ(様式1) 41ページ

● 即日検査結果説明(検査当日)

陰性

→ 即日検査が陰性となった方へ(様式2) 42ページ

陽性(要確認検査)

→ 即日検査が陽性(要確認検査)となった方へ(様式3) 43ページ

● 確認検査結果説明(1~2週間後)

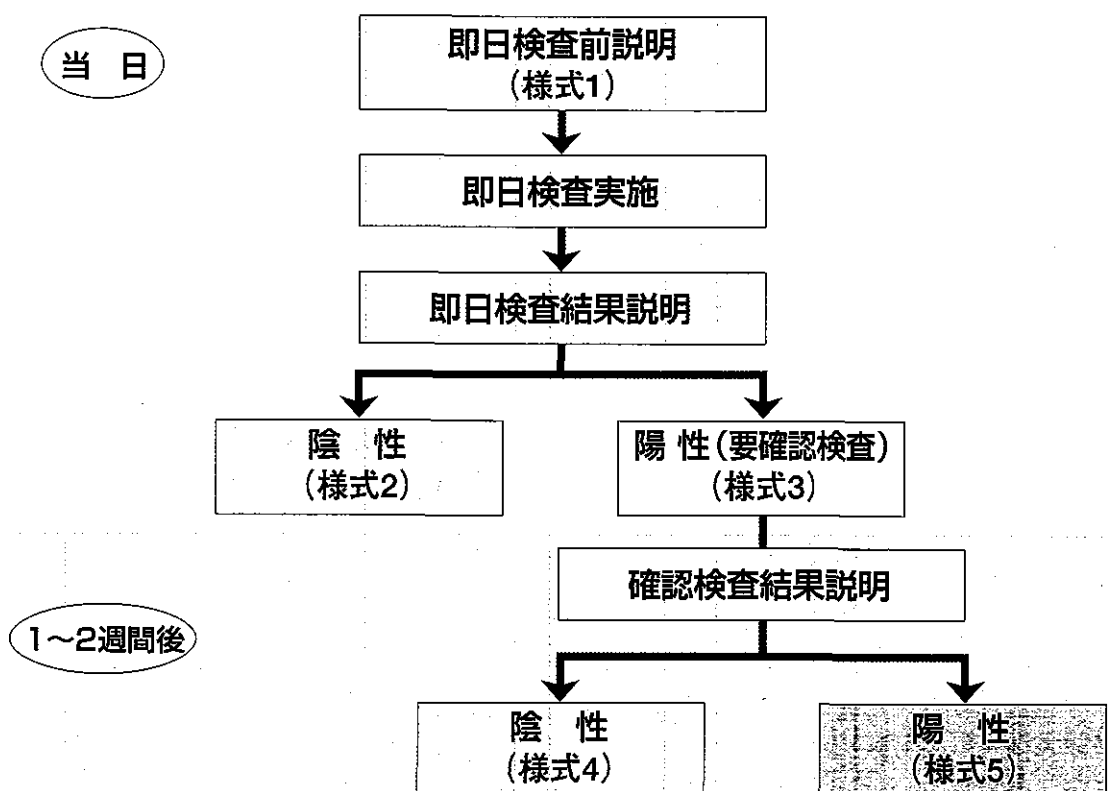
陰性

→ 確認検査が陰性となった方へ(様式4) 44ページ

陽性

→ 確認検査が陽性となった方へ(様式5) 45ページ

受検者へ手渡す資料のフロー



即日検査を受検される方へ

■HIV即日検査とは？

現在、保健所等でのHIVスクリーニング検査には通常“HIV抗体検査”が用いられています。“抗体検査”は方法が比較的容易で、いろいろな検査キットも開発されており、HIVスクリーニング検査として広く用いられ、信頼性の高い方法です。

即日検査は、この抗体スクリーニング検査法の1つで、迅速診断キットを用いて行います。15分で判定が可能なおことから、皆様にスクリーニング検査結果を検査当日（即日）にお知らせすることができるようになりました。

即日検査で 陰性 の場合

感染の可能性のある行動から3ヶ月以上経過してから検査を受けた場合は、「HIVに感染していない」ことを意味します。

まだ3ヶ月を経過していない場合は、HIVに感染していないことを確定するためには、3ヶ月以上経ってから、再検査を受けることをお勧めします。

即日検査で 陽性 (要確認検査) となった場合

迅速検査で陽性“要確認検査”となった場合には、より精度の高い方法で確認検査をおこないます。迅速検査では100人に1人(1%)くらいの方が感染していないのに陽性(これを偽陽性といいます)となることがあるため、確認検査により、真の陽性(HIV感染)か、感染していないのに陽性となった“偽陽性”か、確認検査で見分ける必要があります。このため、もし即日検査で陽性(要確認検査)となった場合には、後日(通常1週間から2週間後)確認検査の結果を聞くため再度来て頂くことが必要になります。

■感染の可能性のある行動からどれくらいの期間が経っていますか？

感染の可能性 のある行動から 3ヶ月以内 の場合

HIVに感染しても感染初期には血液中に抗体やウイルスが検出されない期間(ウィンドウ期間)があります。このため、この感染初期に検査をすると、感染していても検査で陰性となることがあります。

通常は、感染後1ヶ月くらいまでに抗体が検出されるようになりますので、感染の機会から1ヶ月以上経ってからの検査で陰性であれば、感染の可能性はかなり小さくなります。2ヶ月以上経っての検査であれば感染の可能性はほとんどないと言えます。但し個人差もあるため、検査前3ヶ月以内に感染機会があった場合、感染の可能性を明確に否定するためには、感染機会から3ヶ月以上経ってからの再検査をお勧めします。

●HIV検査に関する情報は…

「HIV検査・相談マップ」ホームページ <http://www.hivkensa.com>

(パソコン、携帯電話(iモード、ezweb、vodafone)からアクセス可)等もご覧下さい。

即日検査が陰性となった方へ

■ 本日の即日検査の結果は「陰性(いんせい)」でした。

即日検査が陰性ということはHIV(エイズの原因ウイルス)に対する抗体が検出されなかったということです。

HIVに感染すると、通常は1ヶ月後には抗体が検出されます。

今回の検査は即日検査ですが、抗体の検出感度は通常の検査法とほぼ同等ですから、感染の機会から安全をみて3ヶ月以上過ぎていれば、HIVに感染していないことを意味します。

つまり、「感染の可能性のある行動」(コンドームなしのセックスなど)から、既に3ヶ月以上経過しており、しかもその後は「感染の可能性のある行動」をしていなければ、あなたは現在もHIVに感染していないと思われます。今後も(コンドームを適切に使うなど)感染の可能性のある行動を避け続ければ、HIVに感染することはなく、今後は検査を受ける必要はありません。

もし最後の感染の機会から3ヶ月以上経過していない場合は、3ヶ月以上たってからもう一度(念のため)検査を受けることをお勧めします。

■ 今後の生活で感染の危険・不安を避けるために、次のことを心がけてください。

- 性行為のときは相手の精液・膣分泌液とあなたの粘膜(性器や肛門、口腔)が直接接触しないよう、最初から最後までコンドームを確実に使用してください。
- 他の性感染症(クラミジア・淋菌・梅毒・ヘルペス・尖形コンジロームなど)に感染していると、HIVに感染する可能性が数倍高まります。もし心配があれば、あなたの性交渉の相手も含め、これら性感染症の検査を出来るだけ積極的に受け、必要な場合は治療をすることを心がけてください。性感染症の検査・治療は、男性であれば泌尿器科、女性であれば産婦人科で受けることが出来ます。また、他の保健所において性感染症の検査を実施しているところがあります。

■ 今日の検査を受けるきっかけとなった問題や不安は解決しましたか?

あなたが感じた問題や不安は、もしかしたら思い込みによるものかもしれません。逆に、今日の検査結果に安心して、再び感染の可能性のある行動をして感染してしまうケースもあります。

どのような行為が感染の危険があり、どのような行為がより安全なのか?もし、疑問が残っているようでしたら、この機会に必ず解決し、今後とも感染のないよう十分気をつけて下さい。

また、あなたの周囲にHIV感染の心配を抱えている人がいるようでしたら、今回の経験を生かし相談にのり、必要があれば検査を受けることを薦めてあげてください。

- HIV検査に関する情報は…

「HIV検査・相談マップ」ホームページ <http://www.hivkensa.com>

(パソコン、携帯電話(iモード、ezweb、vodafone)からアクセス可)等もご覧下さい。

即日検査の結果が陽性(要確認検査)となった方へ

■ 即日検査(迅速スクリーニング検査)の結果から、確認検査が必要となりました。

迅速スクリーニング検査では、検査試薬の非特異な反応により、100人に1人くらいの割合で、感染していなくても陽性となることがあります(これを偽陽性と呼びます)。このため、この偽陽性がHIV感染による本当の陽性かを確定するためには、さらに精密な検査(確認検査:ウエスタンブロット検査等)を行う必要があります。この確認検査は専門の検査・研究機関で行います。

あなたの確認検査の結果は、____ 日後に分かりますので

年 月 日 () 時に必ず聞きに来て下さい。

。。。▶もし確認検査で「陰性」となったら

本当はHIV抗体陰性でHIVには感染していないことが分かります。

。。。▶もし確認検査で「陽性」となったら

本当にHIV抗体陽性でHIVに感染していることが分かります。

もしHIVに感染していることがわかった場合には…

現在は、治療法の研究がすすみ、感染していても健康を回復したり、維持したりすることができるようになりました。現在の体調に問題がない方も、専門的な治療を受けられる医療機関・医師のもとで、まず現在の健康状態を知り、また今後の健康管理と治療の相談をしてください。受診する病院や医師は自由に選ぶことができます(後で変更もできます)。

④ 専門病院で受けられる医療

最新の医療情報に基づき適切なアドバイスを受けることができます。治療の主な内容は、定期的な血液検査と内服薬の服用です。薬の処方、血液検査の結果や個人の生活スタイルを考慮してその内容や服薬時期が決められます。

④ 医療費の支援があります

高額医療費・障害認定・更生医療など、検査や治療にかかった費用を補助する制度があります。専門病院の医療福祉相談員や看護師におたずねください。

④ プライバシーの保護について

医療における個人情報保護はされています。あなたに無断であなたの個人情報をご家族やパートナーに知らせることはありません。安心して医療機関や各種サービスをご利用ください。

④ 日常生活について

◎ 家族への感染予防

食事・入浴・施設の共用など日常生活で感染することはありません(感染力をもつものは血液・精液・膣分泌液・母乳等の体液だけです)から、特に制限はありません。

◎ パートナーへの感染予防

セックスでは相手に感染させるおそれがあるのでコンドームを使用するなど予防を確実に行ってください。また、既に感染している可能性のあるパートナーには、できることなら検査を受けることをすすめてあげてください。